

第8章

死の苦からいのちもうけ



## もつて瞑すべし白髪の老婦人

伊豆の下田からバスで降りた停留所の名はいまは忘れた。緑の濃くなつた初夏の頃だつた。畠中の道の向こうはNさんの別荘のある小高い丘、丘の向こうは海と聞いてきた。Nさんは亡き夫君が残されたこの地の別荘を自ら主宰する健康運動や文化活動に利用されていた。このときはがんの食餌療法（ゲルソン療法）の実演とハープの演奏があるということで、私も招かれて出かけてきたのであつた。

ふと見ると前方を老婦人が二人連れ立つて同じ道を辿つてゐる。同じバスで降りたらしが、私は目の前のタバコ屋の公衆電話でNさんに電話していたので少し遅れたのだった。足を速めて追いつき、声をかけたらやはり参会者であつた。

三日後、この二人連れの一人、斎藤りつさん八十一歳（仮名）が娘さんに付き添われて私のクリニックに姿を見せて再会することになつた。このたびの会で生命素の相補的医療

についての私の話を聴いて、それをぜひやってみたいとの再会の挨拶であつた。

「実は私、脾臓がんであちこちに転移しています。トシに不足はないのですが、孫のためにもう少し生きていきたいのです。孫は父親がいないのですから……」

と、傍らの娘さんを見やりながら言う。お孫さんはこの娘さんの子と言わずと知れた。どこにでもありがちな話とはいえ、老婦人の病と老いの苦。共にある母と子の生の苦が思いやられた。

私はやおら気を取り直して、

「このあいだの会合での食餌療法はとてもいいのですが、問題は、がんが進行していくことです。これに対してもう一つ行為は、遅ればせにスタートしてそれを追いかけてゆくということです。逃げ足の遅いがんならともかく、速いがんでは食餌療法では追いつくことはおぼつかないというのが現実なのです」

「ほんとに私もそう思います。もつと早いうちならともかく、私のようになつてしまつては……。それで、先日の先生のお話を伺つてこれだつと思いました。一日も早くと思いまして……」

「このあいだお話ししましたが、食餌はつまるところ太陽エネルギーの取り入れです。し

かし日常の食はもとより、どんな厳格な食餌療法でも、それは太陽エネルギーの間接摂取です。がんに限らず生命力の落ち込みには間接摂取では追いつけないので。そこで直接摂取を可能にしたのが生命素なのです。同じ太陽エネルギーの取り入れであつても、間接は緩やかに、直接は急に働きます。つまり、食餌療法の凝縮した効果がいますぐに得られるのです」

「そういう方法があるとなると、私のような者はとても心強いです」

「いまおやりの食餌療法はできるだけお続けください。それに生命素が加われば鬼に金棒です」

老婦人と娘さんは私の話にいちいちうなずいてくれた。

十日後、齊藤さんは生命素をのんでの経過を電話で知らせてきた。

「体がしつかりしてきました。はじめてのんだその晩からよく眠れるようになりました。  
えらくよいものに巡りあえた気持ちです」

ご老人にはよくあることだが、齊藤さんも眠りが浅く、安定剤と眠剤をのんでいた。それでもぐつすり眠ることができずにいつも体が疲れている。疲れているのに眠れないとい

つた状態であつたという。

「それから目がはつきりしました。目がこんなにパツとしているのは、もうずいぶん長い間なかつたことです」

とも言う。それにこの人の電話の声に張りが出ていて。

「声がとてもよくなりましたね」

「確かに声が楽に出るようになりました」

「ある有名な女性歌手ですが、声が衰えて歌手としての生命が断たれると言つて來た方がありました。咽喉科では異常なしと言われたとのことで、思い余った様子でした。診察で体力気力の衰えが明らかに見て取れましたので、生命素を用いたのですが、以前にも増して声がよくなつたと喜ばれたことがあります。プロの歌手でも病氣して復帰したときなどに聴くに堪えないことがあります。咽喉の問題ではないのです」

「分かるような気がします」

「それに、手やお顔がすべすべになつたでしょ。こすつてみてください」

「ほんと、すべすべです」

こうして斎藤さんは、余生を生命素の相補的医療に全託することになつた。その後の様

子はご本人と娘さんからこもごも電話でもたらされた。

「私、全身がんと言われていますが、先生のお薬をいただくようになつてから病気のことは半ば忘れました。若いときの体調が戻ってきました。このトシでこんな大病しているのに不思議です」

二ヶ月後にかかるときの電話の声は浮き浮きしているような感じさえ受けた。

齊藤さんはこうして病気が消えてしまつたような平安な日々を一年七ヶ月過ごして、何の苦痛もなく亡くなられた。亡くなる直前まで家人と談笑していたという。一ヶ月に一度は体調のよいことを知らせてくれていたので私は言葉がなかつた。

「実は二～三ヶ月の余命と言わされていたのです。伊豆で先生と出会つたお蔭でここまで生きられました。天寿を全うしたものと思います。まったく苦しまずに、お医者さんも不思議がつっていました。解剖させてくれないかと頼まれましたが断りました」

との娘さんからの伝言であつた。その人の受けた医療が最期の善し悪しを決める。齊藤さんの経過を見るにつけても、大自然の摂理に委ねるのが一番であることに思い到る。この方を解剖していたら、あり得ないと思われるような所見が得られたのでは……。

「あり得ないことが起きました」という生命素にまつわる報告がよくある。「家内が心不全で緊急入院しました。私がのんでいるのをのませていいでしょうか」と、ご主人からの電話であった。この方は八十八歳という高齢で、難聴、頻尿、目がかすむということを訴えて、遠方から私のクリニックを受診されたのだつた。生命素と漢方の腎系統の補剤を併せて用いていた。

奥さんは八十一歳のこと。心不全は虚労の極み、亡陽の現象である。一刻をあらそ  
う。太陽の大きいなる陽の付与によつて直撃的な回生が期待できる。主治医に断つてご主人  
のみ分をすぐのませてあげるように告げた。

こうして、はからずも夫君愛用の生命素が奥さんの救命に役立つたのであるが、話はそ  
の後のことなのだ。まさにあり得ないことが起きていたのである。

あとから知らされたのであるが、奥さんは四カ月前に肺がんと診断されていたのだと。  
股関節にできたがんの転移だつたという。その時点で余命三～四カ月と言われ、抗がん  
剤、放射線の治療を拒んで家に在つたとのこと。この間胸水が貯留し、二回取つてもらつ  
た。胸痛は鎮痛剤で、呼吸困難は酸素吸入でしのいでいた。こうした状態の最中で心不全  
を起こしたのであつた。

さて、奥さんは生命素で心不全から救命されただけでなく、胸水、胸痛、呼吸困難などの肺がん末期の症状がまったく消えてしまったのである。原発の股関節の痛みも取れてしまったという。食欲が出て、血色がよくなつて、前記の齊藤さんと同じく、病人のようになくなつたとのこと。二ヵ月足らずのあいだに起きたことの報告であつた。

夫君が言うには、

「実は住居の前が病院で、心不全で入院したときにもういたしかたないと、主治医から引導を渡されたのです。それが見る間によくなつたのです。家の喜びようたらありますん」

との夫君の声は弾んでいた。

股関節と肺がんの末期で心不全を起こした、しかも八十路やそじを越えた人に、太陽の大きいなる陽はとてもない働きをしたようである。主治医はレントゲン写真を見ながら、あり得ないことですと首を傾げていたといふことであつた。

医療は万能ではなく不確実なものだ。虚労の甚だしいときは対処を誤らないようにしなければならない。負担の大きい治療は極力避けてそつとしてあげたい。といつても、たゞ手をこまねいているわけにはいかない。太陽の大きいなる陽を取り入れたらよいのである。

生命の消長を左右している陰陽の理法に随つたとき、この事例のように思いもかけないことが起きるものだ。

人のいのちには限りがあることを見据えていかなければならぬが、与えられたいのちを生き切ることができないのが多くの人の習いである。ところが、当たり前ならもう終わりになるであろうのちも、陰陽の理法に随つて太陽の大きいなる陽を取り入れることによつて、天与のいのちを生き切ることができるるのである。そのうえ、大自然の摂理に委ねたいのちはその終わりのときも安らかである。何よりの救いである。

### 飼い猫に生命素を与える人

がんの患者会の機関誌に載つた生命素の記事を見て、九州の長崎からはるばる訪ねてこられた方がいた。一年前に帯状疱疹に罹り、そのとき乳がんが発見されたという。すでにステージIVで、肺と骨に転移しているという最悪の状態であった。中村由美さん四十三歳

(仮名) という。

中村さんはこのときから私の指示に従つて生命素の相補的医療をはじめた。すでに五年を経過したが元気である。この間、容体報告書に日常を克明に記して送つてくる。それが、自分の容体だけでなく、飼い猫の容体まで書いてくるようになつた。猫にまで生命素を与えたはじめたのである。

余談になるが、犬や猫に生命素を与えたところ、異常なまでに欲しがるという話をよく聞く。動物は生命にとつて真に良いものを見分ける本能が人より勝れているとみえる。飼い犬の耳に腫れものがでて、獣医からこれはがんだから駄目だと言われたのに生命素を与えたなら、異常なまでに欲しがつたという。十五キロほどの犬であつたが、耳搔きに一杯を毎日与えていたら、いつの間にかその腫れものが消えてしまったと話した人がいた。

この人は看護師さんで、疲労困憊してもう勤めができない。しかし家のローンを抱えているので辞められないとのことであつたが、生命素をのんだら翌日からこともなく勤務できるようになつたと、しばらくして電話してきたのであるが、そのときこの飼い犬の話を聞かされたのだった。

さて、中村さんのことであるが、猫のことよりご本人のことが心配。この方は来院時の診察で腹直筋（臍の両側を縦に走っている筋肉）が硬急（硬くつっぱっている）していること、左下腹部に索状の硬結（繩のようなしこり）が触れた。死後硬直は腹直筋からはじまつて全身に及んでゆくもの。生きながらにしてそれがあるのは生命力に乏しいこと、虚労を証している。左下腹部の硬結は瘀血の存在を示すものである。

一週間後の九月十日にご本人から電話があつた。七日に大量の黒便が下つたという。瘀血の排出で良い徵候である。乳がんや子宮がんの場合は腹診で瘀血が認められることが多い。瘀血はさまざまの病気の原因になつていて、漢方には陰陽虛実によつて使い分ける駆瘀血剤が用意されているが、あえてそれを用いなくとも、生命素で瘀血が排出されることが多い。

中村さんの経過は、容体報告書で知ることができた。

十月一日から抗がん剤をのみはじめた。これまでも何回もこの治療をして、脱毛がひどかつたのでやりたくないが、前からの予定に入つていたので仕方ないこと。  
十一月八日、前回の抗がん剤治療のときは生理が止まつてしまつたが、今回はきちんと

ある。お蔭さまでと記してある。

十一月十三日、抗がん剤の副作用がまったく現れないで驚いているのこと。

十一月二十七日、体調がよい。前のときの脱毛の跡に発毛しているのが目立つてき  
た。今回は二クール目の抗がん剤の治療であるが、副作用はまったく現れないこと。

こうして新年を迎えた。体調はすこぶるよい。尿量と排便量の多いのが際立つ。眠りが  
深くなつたこともこれまでとは違う。この年の容体報告書には空欄が目立ち、時々かかつ  
てくる電話も体調がよいというだけで愁訴は何もない。

新たな年を迎えてからも変わりなく、よい体調が維持されている。病気のことを聞いて  
も言わない。病気はもう忘れたと言うだけで検査もしていないという。自分のことは言わ  
ず猫のことばかり言う。私も少々あきれ気味であった。

その猫であるが、臍胸になつていたのに生命素を与えた途端に食欲が出て、それまで午  
後になつてからしか食べなかつたのが朝から食べるようになつた。隣人の言うには餌を与  
えても見向きもしなかつたのがもらいにくるとのこと。もう一匹は老衰で弱つていたの  
が、これもすぐ元気になつて、これまでの頻尿も治つたといふ。

生命素で人の若返りが際立つて見られる。美容効果も素晴らしい。相貌まで良くなり、

輝いて見える。猫の場合はどうなのか？ いずれにしても容体報告書に猫の容体まで書いてきた人ははじめてである。自分のことは書くことがなくなつたとしても、そこまでしなくとも……。私としても苦笑いの、人も猫も一件落着した事例である。

この事例には後日談がある。中村さんは猫だけでなく、人にも自分ののみ料の生命素を与えていたことがあとで分かつた。なぜかと云うと、

「こんな素晴らしいものにもつと早く出会つていたら……」

との出し抜けの電話がかかつてきただのである。中村さんの猫のことでの隣人の話に触れたが、その家の奥さんからであった。

聞けば夫君（七十五歳）が前立腺がんで、骨に転移して腰背痛で苦しんでいたという。体衰氣弱が甚だしく、絶望の淵に立たされていたことを長々と話す。隣人の中村さんと猫が元気になつたことを目の当たりにし、それならうちの主人にもと、中村さんののみ料を分けてもらつてのませたというのである。

こういう話には私はいつも当惑する。生命素を用いるには「陰多くして陽少なし」の虚労であることを確かめなければならない。陽病や実証に用いても害はないが、理に合わな

いから効果はない。自分によかつたから、猫にもよかつたからといって、人にもやたらに分けてあげる、では困るのである。

隣家の奥さんは、ご主人に与えたその日から気力が出てきたことはつきり分かつたといふ。そしてその夜から夜間尿が三回で済むようになったといふ。これまで三十分から一時間ごとに起き、眠りを妨げられていたので、有り難い、有り難いという奥さんの電話の声であつた。

あとで聞いたことであるが、腰背痛は消長はあるが日を追つて和らぎ、約一ヵ月経つてからは起居が自由になり、車椅子で外出できるようになつた。痛みが消えたのもさることながら、気力が充実したのがうれしい。体重が一キロも増えたので驚いたという。

「治るでしょか」

と奥さん。ご主人のあまりにも劇的な変わりように、こうも聞きたくなるであろう。がんの末期の場合のこうした問い合わせに、私は「太陽の太いなる陽を取り入れることは大自燃の摂理です。これに全託したらよろしいのです。世にいのちを託せるものなんてそういうもんじやありません。しかし、生きとし生けるものを生かしている太陽エネルギーへなら託せます」

と答えるほかない。この家のご主人の場合、末期であるし、ご高齢もあるし、このうえは生命の高揚をいかに長く維持できるかであった。奥さんは私の言を素直に受け入れてくれて、夫君はその年の秋、翌年の春と車椅子での四季を彩られた。こうした動静を電話で聞くたびに、私はまずまずのことと思つていた。次の年の秋も深まつた頃、「安らかに逝きました。天寿を全うできたものと思います。先生のお蔭です。有り難うございました」

と、奥さんからの丁重な電話であつた。この人のように如何ともなし難い状況にあっても、生命素によつてQOL（生活の質）を高め、天与のいのちを生き抜くことに積極的に挑戦できるのである。広い意味でのいのちもうけである。猫の取り持つご縁であった。

## いま一度家に帰りたいという人

肝がんで腹水の貯留が著しく、両下肢の浮腫もひどいという飯田さきさん五十一歳（仮

名) の事例である。

「いま一度家に帰りたいと言つております」

との家人の訴えであつた。この方は入院中の病院の主治医を介してのことだつたので、私は余計な気遣いすることなく生命素を与えることができた。

後日受けた報告は、はじめたその日から尿量がきわだつて増えた。右下肢から浮腫が引きはじめ、三日後には骨と皮ばかりの足になつたといふ。これを聞いて私は、足から引きはじめたのはとてもよい兆しであることを家人に話す。三日後に二回目をのんでは左下肢からも引きはじめ、この時点ではパンパンに張つていた腹も軟らかになつていてことに気が付いたといふ。

六日後には腹水もウソのように消失した。そして食欲が出て病院食が楽しみになつたこと。これに勢いを得て三日に一回のみ続けたところ、体力が回復して二カ月半後には退院に漕ぎつけることができた。いま一度家に帰りたいという願いを叶えてあげることができたのである。

こうして飯田さんは、自宅に在つて平穏な日々を過ごされたが、八カ月を過ぎた頃、しきりに腰背部の痛みを訴えるようになつたとの連絡があつた。こうしたときは再入院させ

るようになると、家人は主治医から言い含められていたが、ご本人は二度と病院へは戻りたくない。どうしたらよいものかと言つてきた。

がんの末期は大自然の生命消長の理法に全託したらよいというのが私の想いである。がんに限らず、すべて生命の危うきは亡陽の現象なのだから、太陽の大きいなる陽を取り入れるという大自然の摂理に身を託すのが一番。陽が補わると身も心も楽になる。延命できるのは言うまでもない。広い意味でのいのちもうけである。

私は、ご本人が家にいたいというのであればそれを叶えてあげたら……、それも生命素あつてのことではあるが……。これなくば在宅介護は無理であると、日頃から思つてゐる通りを伝えた。

こうして飯田さんは生命素に余生を全託することになった。痛みに対してはのみ量を増やすとよい。そこで倍量にしてみたところ、軽くはなつたが痛がつてゐること。こうしたときの適量は個人差があつて、生まれつき虚証タイプの人は少量でよく、実証タイプの人には多目でないとならない。

飯田さんはさらにのみ量を増やして、その日のうちに痛みが楽になつたと言つてきた。こうした経過からして、この方は生来丈夫な人であつたと思われた。そこでそのことを家

人に質してみたらやはりそうであつた。これといって病氣したこともなく、タフな人であつたという。

こうして飯田さんは再び苦痛から逃れた平穏な日々を取り戻すことができた。苦痛がないと家人からは何も言つてこない。私も安堵の思いであつた。

ところで、このまま治つてしまつたら万々歳であるが、飯田さんは末期で、ひどい壊病の状態であつたのでそれは叶わなかつた。

「あのみじめな状態から抜け出しができちようど一年です。安らかな最期でした。

先生のお蔭です」

と家人から挨拶があつたのは、何も言つてこなくなつて二ヵ月ほど経つてからであつた。私には返す言葉もなかつた。

この飯田さんと相前後してもう一人、いま一度家に帰りたいといふ人がいた。高橋利子さん五十二歳（仮名）といふ。

ご本人のたつての望みであるからとの主治医の依頼で、生命素を与えたところ全身状態が好転し、二ヵ月後には退院となつた。そのときが余命と言われた半年目であつたとい

う。

高橋さんは乳がんが皮膚に浸潤して潰瘍を形成していた。肋骨が見えるほどという。生命素のはじめの一回で、気力が出てきたと本人が言っていますと、主治医から知らせてきた。

その翌日、尿量が非常に増えたとのこと、なのに、足趾（足の踝より先）に浮腫が現れたりと訴えてきた。さらに三日後、二回目をのませたら少量であるが瘀血の排出があったと知らせてきた。

こうした瘀血の排出や足趾の浮腫は特に好ましい瞑眩である。幸いに主治医は漢方を学んだ人だったので言わずと分かつてくれた。私の言つた通りの反応があつたのでご本人も家人も驚いたとのことであつた。こうした瞑眩があつたことは、それまで下り坂にあつた生命体が一転して上り坂に転じたことを物語るもので、一見悪いことと思われる浮腫も、前章で説明した如く瞑眩の一つである。それも、体内浄化の働きが一挙に盛り上がつたことを示す好ましい反応である。

高橋さんは生命素をのみはじめてから一ヶ月ほど経過しての検査で、肝臓の転移がんの進行が止まっているという驚くべき結果が出たのである。身動きもできないほどの腰や背

部の痛み、咳をするたびに響いて堪えがたかった痛みがいつの間にか消えて、その咳も痰もなくなった。どうやら進行が止まつたのは肝臓がんだけではなさそうだ。

高橋さんは生命素をのみはじめて二ヵ月と十日後の十月十五日に退院できた。その年の桜の頃余命半年と言われていたことで、前例の飯田さんと同じくその半年目に、家に帰りたいという願いが叶えられた。この時点で胸部の潰瘍も誰の目にも分かるほど、肉芽の形成が目立つたという。がんそのものが治つたわけではないが、全身状態がよくなつたのでひとまずの退院が許されたのであつた。

退院後はのみ量を減らしてみたりしたが、時に多目にすると体調がよいということであつた。こうして高橋さんは自宅で平穀な日々を過ごされて、翌年の秋忽然と亡くなられた。何の苦痛もなかつたと知らせてきた。胸部の潰瘍は四分の一ほどに縮小していたといふ。

安らかであつたというその最期を聞いて、いま一度家に帰りたいと言つていたといふ人の願いを叶えてあげることができて、私もせめてものことと瞑目したことであつた。

こうした事例を見るに付けても、たとえ余命が限られた状態であつても、生命素による補陽が余命を鼓舞してくれることは明らかである。免疫力が發揮される。QOLが高ま

る。何よりもよいことは心身共に楽になることである。生きとし生けるものを生かしていく太陽の大きいなる陽の直接摂取——生命素に全託することによって、はじめて得られることである。

## 母に安らかな最期をとの息子さん

安らかな終幕を引きたいとだれもが願う。終末期患者を受け入れる緩和ケア病棟（ホスピス）があるが、わが国の場合、ホスピスで生の最期を過ごす患者はわずか数パーセントだ。ホスピスの病床のある病院が少ないからである。ホスピス先進国のスウェーデンでも三〇パーセントという。

内閣府の高齢者健康意識調査によると、最期は自宅で迎えたいと望んでいる人が半数を超えている。しかし、現実には八〇パーセントの人が病院で亡くなっている。在宅ホスピスは医師が患者のもとへ足を運ぶことが前提となるから、終末期の在宅介護は進まないの

である。

生命素の相補的医療をがんの末期でどうしたらよいか迷つてゐる人々にすすめたいといふ私の記事を見て、「母のことで……」と、その息子さんが近県のある市から見えた。

聞けば母親（七十五歳）が子宮がんと皮膚がんのこと。皮膚がんは手の甲と腋窩を二年ほど前に手術したが、最近に至り左鎖骨上部に転移したのを手術し、入院している。体力、気力の衰えが甚だしい。母にもう一度元気になつてもらいたいので……との訴えであった。

主治医の許可を得てゐるというので、病院の冷蔵庫に冷凍保存してもらうように言い含めた。こうして母親が生命素をのみはじめてから亡くなるまでの百九十日余りの報告書を息子さんが書き送つてくれたので、原文のまま載せた。生命素の何たるかを物語るものである。

月	日	全身状態、体調の変化など				
2/24	2/23	2/22	2/21	2/20	2/19	
婦人科の先生に「殆ど出血がなくなつた。輸血の必要がなくなつた」と言われたと娘より電話あり。よかつた。		婦人科の先生に「レンガ色のおりものが出来ました」と言われたと娘から電話あり。杖を使わずに歩行したという。	午前十時三十分、自力でトイレを往復した。杖について歩いたと付き添いの娘から電話があった。	婦人科の先生から「大分出血が減りましたね」と言われたと、付き添いの娘から電話があつた。	午後一時にはじめてのむ。午後十一時十五分、ベッドから自分でおりた。いままでは手を貸さないとおりられなかつた。	

第8章 死の苦からのいのちもうけ

3/6	3/5	3/4	3/3	3/2	3/1	2/28	2/27	2/26	2/25

多目にのませました。

格別の変化はありません。良好な状態が続いています。

多目にのませました。

お蔭様で退院できました。

多目にのませました。

大便が出ません。

婦人科の先生に「膣が出ました。これはいいものが出来ました」と言われたそうですが（註＝膣の排出は瞑眩）。

3/15	3/14	3/13	3/12	3/11	3/10	3/9	3/8	3/7
								前日六日から七日朝にかけて、眠りが深くなつた（註＝のみ量を増やしたので効果 が増大）。

大便がコロコロ出ました（註＝宿便の排出）。

大便が前日と同じくコロコロ出ました（註＝宿便の排出）。

大便が大量に出ました（註＝のみ量を増やした効果）。

昨夜は熟睡したようです。

大便は順調に出ているようです。

話し声が大きくなり、張りが出ました。

第8章 死の苦からいのちもうけ

3/22	3/21	3/20	3/19	3/18	3/17	3/16
この間五ヶ月、空欄が多く省略。	良好です。左手足のむくみだけがとれません。リンパ液が溜るのだそうです。このほかはほんとうによくなりました。	元気です。		実際に柔軟なよい表情になりました（註＝相貌までよくなる）。	よく眠れると言っています。	

8/28

眠つてばかりいます。目を覚ましたときのませようとしても嚥下できません。

8/30

8/29

8/31

午前四時十分永眠しました。生命素をのみ始めてから苦しみもなく、ろうそくの火が消えるようでした。八月も後半の十日間はほとんど昏睡の状態でしたが、自宅で家族に見守られて逝きました。思えば私が先生にお願いに上がってより半年余り、本当に有り難うございました。またお世話になるときはよろしくお願ひ申し上げます。長い間本当に有り難うございました。

漢方の方剤は急性病にも即効するものが多々あるが、慢性病にはおおむね二週間ほど用いてみないと効果のほどが分からぬことがある。それも難症であつたり、体质改善を目的とするときは長服（持薬として長く用いること）しないとならない。

実証の人の病は陽に発し、陽病の病態を呈する。虚証の人の病は陰に発し、陰病の病態

を呈する。陰病の場合は不足の陽を補つてやることが何にも増して優先する。陽が少なくなり、陰が大きくなるほど病勢がすすむからである。陽がゼロになったときが死。生命消長の陰陽の理である。

陽病にあつては、病勢の急変や誤治によつて陰病に転入することがあるのを除けば、ことさらに補陽を必要としない。太陽の大きいなる陽を取り入れるのは、どこまでも「陰多くして陽少なし」の陰病のときである。

右の子宮と皮膚のがん患者さんの事例を見ても、生命素による陽の付与が、がんの末期という虚労の病に、いかに直撃的に、しかも優しく働いたかが分かる。

殊に注目すべきは、「実に柔和なよい表情になりました」という息子さんの母を見る目の驚きである。恐らく、お母さんは心身共に楽になつたことと思われる。生命素によつて相貌までよくなることは屢々見聞きする。大自然の摂理に適うものでないところとした現象は見られない。

生老病死の何れにも、苦の深いほど憂いは相貌に表れてそれと知られる。ましてがんの末期ともなると、見守る家人は惻隱の情に駆られる。そうしたやるせない状況にあつて

も、太陽の大きいなる陽が付与されると人は心身共に樂になる。安心立命が得られることは、ご本人は語らずとも、苦渋に満ちていたその顔が、誰の目にも柔和な安堵の相貌になることでそれと知られる。

臨終にまつわる不思議な話も聞いた。肝がんの末期で生命素をのんでいた人の娘さんから、その母親が亡くなつたことを知らせてきた電話であつた。

「不思議なことが……」

と言うので聞き耳を立てたのであるが、

「母は息を引き取つてから顔かたちが打つて変わり、優しさに溢れていました。安らかに旅立つたことが思われて、家族の者みな救われた想いで涙しました」と。聞けばこの方は生前とても氣性の激しい方で、キツい顔つきであつたとのこと。

「母は疾うに亡くなつていたように思われます。それが、生命素で生かされていたように思われて仕方ないのです。亡くなる前に母が優しい顔をして挨拶に見えたという親戚が何人もいて、驚かされました」と。こうした知らせを聞いて、私は何と答えてよいか言葉に窮したことだつた。

## 亡くなられてから知ったすごいこと

これは生命素にまつわるがん治療の忘れられない事例の一つである。安田妙子さん三十七歳（仮名）が夫君と共に私のクリニックを訪れたのは、平成八年九月十七日、もうひと昔のこと、卵巣がんの末期と言われているとのことであった。発見は前年の六月で、七月に手術してからは抗がん剤と放射線の治療を受けた。肝臓や全身の骨に転移しているとのこと。

これまで現代医学の通常療法をやり尽くし、そのために白血球が減少しているという。いまは食餌療法より他に為す術がないのでそれを行っているが、食欲がないのでそれも思うにまかせず、どうしたらよいかと思いつめていたとき、その食餌療法の指導者から生命素のことを聞いたとのこと。

腹診すると二ヵ所に瘀血が認められた。過去二回の出産が切迫早産だったとのことで、

この瘀血が禍いしていたと思われた。瘀血は下腹部の酸素欠乏を招き、卵巣の発がんへと繋がつていつたといえる。心下（みぞおち）から右肋骨弓下の抵抗が強度で、肝臓への転移もうなづける。

子宮や卵巣など女性特有のがんには、必ずといってよいほど瘀血の存在が認められる。故にこれを駆逐することが急がれる。

別の事例であるが、あるとき、

「黒いドロドロしたものが出でます」という電話での報告。瘀血の排出であつた。次のようにきさつであつた。

夫君が咽喉がんとのことで奥さんから電話での相談。「つれて来られますか?」と聞くと、

「私の運転で……」

とのこと。県北のある町からで一時間ほどの距離であつた。

約束の日時、奥さんと共に診察室に入ってきたご本人を見て、こうした患者さんを見慣れている私もさすがに驚いた。痩せこけて目がギョロリとして、両手でズボンのずり落ち

るのを押さえている。腹水でお腹がふくれてベルトが届かないものである。ものすごいそれは屁臭と思われるほどの異様な臭いが鼻をついた。あとで職員から聞いたのであるが、階上の診察室に接する待合室はもとより、応接室、その奥のスタッフ室、階下の薬局までこの臭いは拡がって、窓を開けずにはいられなかつたということであつた。

この患者さんは椅子に掛けていることもできないほど衰弱が甚だしく、すぐにベッドに横にする。脈は浮数で無力、のどに硬いしこりが触れる。聞けば一年前に下咽頭のがんと言われ、放射線と抗がん剤の治療を受けた。翌年一月に退院して自宅に在つた。この四五日急に悪くなつたということであつた。

これほどの人をよくも連れてきたものである。直ちに生命素を与える。脱水状態であるから家に直行しないで主治医のところに寄るように、必ず……と言い含めた。

三日後、奥さんから約束の電話があつた。このあいだは帰宅途中から尿量が増え、パンパンに張つていたお腹が軟らかくなつたこと、低体温であつたのが三十七度台に上昇、体が温かくなつたこと、一日中眠つてばかりいること、などを知らせてきた。そしてさらに五日後にのどから黒いドロドロのものが出てたと知らせてきたのであつた。

こうした瘀血は肛門から排出されることが多いが、この人の場合はのどに病変があつた

ので一部が口から出されたのであるが、これと同時に一日四回ほど、大量の黒便が三日にわたって出たという。

瘀血の排出と共にあのひどい体臭が消え、のどのしこりも触れなくなつた。瘀血の排出は病気が好転するきつかけとなる。陽不足の体にあつてはこうした自然療能が盛り上がりないでいる。それが、太陽の大きいなる陽が付与されると、体温の上昇と共にこうした瞑眩が起こり、一挙に治病への転機が訪れるのである。

このことによつて必発する尿量の増加も、体内浄化の一環である。私は瘀血が出たと知らされると、「よかつた……、お赤飯炊かなくては……」と言うのが常である。

話を戻すと、妙子さんも腹診で瘀血の存在が確かめられていたので、これが必ず排出されよくなられると、勇気づけた。ご夫妻はこもごも、

「瘀血なんて、そんなものがあるなんて、知りませんでした」

と。夫君は、これまで奥さんが受けてきた現代医学の通常療法にしても、そのあげくにはじめた食餌療法にしても、何か訛然としない思いであつたとのことで生命素の相補的医療に出会い、

「なんだかこれが自分たちの探し求めていたもののような気がします」

とも言う。

「補陽という治療の対象は病名ではなく、どこまでもその人の全体、生命そのものです。ですからその人の体の在りようによつて選択的に働いてくれますから、陽を補うという大自然からの働きに心身を委ねるという、楽な気持ちになるとよろしいですよ」

「……」

「太陽の大きいなる陽が選択的に働くのは、生命の基幹物質として、それ自体が意識を持っているからです。それは宇宙意識ともいるべきものです。奥さんも、こうした大自然のパワーに全託なさるのが一番よいと思います」

「これまでいいといふものをいろいろと試みてきましたが、やつとホンモノに出会うことができました」

ご夫妻は安堵したよう。こうして妙子さんは生命素の相補的医療に全託することになつた。以後の経過はご本人自筆の容体報告書と、夫君から三日にあげずかかつてくる電話で知ることができた。この記録はあまりにも冗長になるので、途中を省きながら辿つてみる。

平成八年九月十八日より漢方の補剤に生命素を併せてのみ始める。直後体が温かくなり、尿量が増えた。瞑眩だ……、幸先がよい。

翌十九日、この日は休薬、のまないのに全身の倦怠感が強まり、腰痛が起きた。全身状態が悪いほど瞑眩は強く出る。このことを慮つてはじめはのみ量を少な目に、それも三日に一回にして瞑眩が軽く済むように配慮したのだが……？ 腰痛は鎮痛剤で治まつた。

九月二十一日、二回目をのむ。倦怠感が続く。二日おいて三回目、さらに二日おいて四回目の二十五日、尿に泡立ちがあるのに気付く。これまでなかつたことである。光合成の初段階は脱水素と呼ばれる働きが起きることは前記した。この働きは植物の場合はその後の植物体の合成に繋がっていく。動物（人）の場合は活性酸素の消去など、体内净化に働く。

すなわち、水から脱き取られた水素は活性水素。体内の活性酸素と結び付いて水となり、尿として排出される。妙子さんの体にこの働きが起きたわけである。尿量が増える。泡立つことでこのことが知られる。この泡立ちは糖尿病などの病的なものと違つて数分で消える。

腰痛が起きたのは神経の麻痺が取れて、これまで感じられなかつた痛みが感じられるようになつたということ。痛みがあつても感じられないような体こそ問題なのである。それが感じられるようになつたということ。

十月に入り、四日の午後より腹部と腰部に締めつけられるような痛みが起つた。この痛みは消長はあるがしばらく続く。十月五日よりのみ量を増やす。こうして十一月に入つて左のそけい部にあつたしこりが消えているのに気付いた。十一月十六日、この時点ではらにのみ量を増やした。十二月二十四日に手術した跡から透明な滲出液が下着がびっしょりになるほど出た。そしてそこにあつたしこりが小さくなつていた。

いままで何をしても何のこともなかつたのに、生命素をのみはじめてから妙子さんの体に大きな変化が起きた。<sup>なん</sup>こうした変化は、瞑眩と共に体が正常復帰への活動を開始したことを物語るものである。この秋は二人のお子さんの運動会を見に行けたほど体調がよくなつたことであつた。

しかし腹診で瘀血があることが確かめられているのに、それが今もつて出たという知らせがない。それに年が明けてから連絡が途絶えてるので気になつていたところ、二月十日に夫君からの電話で、左足がむくむようになつたと思つていたら右半身が利かなくな

り、ろれつが廻らなくなつて入院していたという。脳卒中と言われたとのことで、私も少なからず驚かされた。

そして、ご本人はどうしても家に帰りたいというので、昨日退院したところであるといふ。これまで在宅のときは近医に往診してもらつて点滴を受けていたが、今回帰宅してからはその点滴が入らなくなつたとのこと。こうなるともう、生命素のみ量を増やすしかない。

二月二十三日、首のリンパ節のグリグリがいつの間にか小さくなつてゐるのに気付く。二十五日、大量の黒便が出たことを知らせてきた。待ちに待つた瘀血の排出である。これまでのみ量が少なかつたせいか、やはり思い切つて增量する必要があつたようだ。

尿量も増えたといふ。その尿が非常に臭いとのことだつた。点滴が再び入るようになつた。首のしこりがまつたく触れなくなつた。今日まで半月間、食餌なし、点滴入らずでよくも生きていたものと、夫君の弁。

三月一日、大量の黒便が一日に八回も出たと言つてきた。食べていいのにこれほどの便が出るのは？と夫君。臭いが強く泡立つ尿と共に、いま妙子さんの体に徹底的な浄化の働きが起きていることが知れた。

三月十一日、腰痛と背部痛を訴えているとの電話。私はそれはがんの痛みではないと思った。電話口の夫君も、本人が以前の痛みと違うと言っているからそうかも知れませんと言ふ。妙子さんは全身の骨に転移があつてその痛みに苦しんでいたが、生命素をのみはじめてからは日を追つてその痛みは消退していたのである。

看病のお母さんがあきれ驚くほど瘀血が出てからは、食欲も出でているという。私ははじめから主食は玄米クリーム、副食は野菜スープと、その作り方を話してあつたが、それすら摂ることができない時期があつた。しかしいまは少量ではあるが摂っているという。体内が浄化されると神経の麻痺が取れて、それまで感じられなかつた痛みが感じられるようになることはよくあることである。

さて、これから何とも名状しがたいことが起きたのである。あとで夫君から電話で知らされたのであるが、ひと昔も前のこと�이まもつて私の脳裡から離れない。

「家内が死にたいと言つております」

夫君からの電話に私はわが耳を疑つた。玄米クリームも野菜スープもおいしそうにのんでいるという。瘀血も出て氣分もいい筈だ。なのになぜ？ 私は絶句した。

「この際、のみ量をもつと増やしたいと思うのですが……」

という夫君。気持ちは痛いほど分かる。しかしその必要はないこと、いまは苦痛はないようだし、むしろ減らしてもよいことを話す。

「でもこの際もつとのませてやりたいと思います。お願ひします」

こうした夫君の熱意には夫婦の愛情の深さを思わせる。

この電話のあと、私は妙子さんが死にたいと言っていることが気になっていた。いま安穏な日々が得られているのに、一体どうしたことであろう？ 長い闘病生活に人はふと、そんな思いが心を過る<sup>よぎる</sup>のであろうか？

しばらく連絡がないので気にかかるつていたところ、一ヶ月ほどしてから妙子さんが亡くなつたことが電話で知らされた。そのとき夫君からもたらされた妙子さんの死の模様は、生命素の何たるかを改めて私に思い知らせてくれるものであつた。

「亡くなりました。たいへんお世話をになりました」

「そうでしたか、残念です。このところ電話が途絶えていたので気にかかるつていました。いつでしたか」

「四月十六日の夜でした。葬儀も済ませましたのでお知らせしたいと思いまして」

「そうでしたか、お役に立てなくて残念です」

「とんでもないです。ここまで生きられたのは先生のお蔭です。ほんとうに有り難うございました」

「特に苦痛はなかつたと思いますがいかがでしたか？」

「ええ、ほんとうに眠るが如くでした。いやあー先生、太陽の大きいなる陽を与えるって、素晴らしいことなのですね。いろいろと驚くことがありました。先生はそんなにのませんぐてもと言わされましたか、何もかもお見通しだつたのではありませんか？」

「そんなこと……、ありませんよ」

「家内が死にたいと言つていることをお知らせしたのは先月の半ば頃だつたと思います。それで先生のお許しをいただいてのみ量を増やそうとしたのですが、家内はこれをのんでいるといつまでも死ねないような気がする。だからもうのまないとつて、いくらのませようとしてもまなくなりました」

「それはいつ頃のことですか？」

「四月に入つてからです。四日か五日頃です。それで先生、驚かないでください。実はそ

の頃から床の上で布団に寄りかかっている家内を見ていると、まるで靈がそこに座っているという感じなのです。いつ見てもその感じが拭えないのです。

先生、驚かないでくださいよ、家内はもう疾うに死んでいたのです。ところが死ねないのです。私、そう思いました。それでもうのまないなんて言い出したのです。先生、生命素つてほんとにすごいものなんですね。私たまげました。

それから先生、家内は生命素と話をしていると言うんです。私、あっけにとられて家の顔をまじまじと見ましたが、何ともいえぬ気持ちでした。いまになって、どんな話をしていたのか聞いておけばよかつたと思いますが、そのときはそう言っている家内はまさしく靈といった感じで、私、背中がぞくぞくして、驚きが先で言葉にならなかつたのです

夫君はさらに驚くべきことを言つた。

「実は私、火葬のとき一人残つて遺骨が出てくるのを目<sup>\*</sup>の当たりにしていたのです。がんに冒された骨は色が薄黒くなつてゐるのをこれまで何回か見ていました。家内は全身的に骨に転移していくのに、それが先生、真っ白なのです。それも密度のある硬い骨でした。

骨壺に入りきらないほどで沢山残りました」

骨細胞も元はといえば血球細胞が転化したものである。病気という非常時にはそれが可

逆現象を起こして赤血球に戻り、生命維持のために使われる。だから骨は少ししか残らない。生命素を摂っていると、骨細胞の血液への可逆現象は起こらずじまいに済むのである。

「それに先生、すごいのを見ました。頭蓋骨もがんに冒されていたのですが真っ白でした。先生、驚かないでください。一ヵ所だけ親指ほどの黒くなつたところがありました。それが先生、その周りを、萌葱色がぐるりと取りまいていたんです」

これには私も唸うなつてしまつた。萌葱色とは生命素の色である。太陽の大きいなる陽を取り入れることによつて、陰性のがんが消去されることは、これまで数多の事例で分かつてはいたが、図らずも妙子さんのご遺骨が、これをさまざまと目に見える形で教えてくれたのである。

夫君の電話はなおも続いた。

「私、先生が生命素とは生命の基幹物質であるとおっしゃつていたのを思い出しました。人を生かすだけでなくそれ自体が生きていると思いました。家内が生命素と話をしたと言つたのは本当だつたのだと思ひます。先生、これは本当にすごいものなんですね」

夫君は「すごい」を繰り返し言う。生命素をのんでいると密度の高い骨が沢山残るとい

う話はこれまでよく耳にしたが、がん化された骨組織を生命素の萌葱色が取り囲んでいたと教えてくれたのは、この人がはじめてであつた。

妙子さんは生命素と話し合つて生死を決めたように思われて仕方ない。夫君にしても私にしても立ち入ることのできない不可思議な世界があるようだ。

## おわりに

医学の進歩は目覚ましい。といつても、それは細胞や遺伝子といったミクロの世界を探究し、病気を特定の部分の病変として診る治療法の進歩である。一見、部分の病気と思われる病変も、その実はからだ全体にその因が潜在するとの視点からの、全人的な医療は二の次にされている。ましてや、生命は大自然とひとつなりのものとする生命の在りようから生老病死を見据えての、相補的医療は置き去りにされている。

また、現代医学は瀉の医療にウエートを置いている。「瀉」とは有余を除く、駆逐するの意であることは本文で述べたが、さしづめ抗がん剤は瀉剤であり、手術や放射線は瀉法と言える。

この本で述べてきた生命素の相補的医療は「陰多くして陽少なし」の陰病や、さらにはいのちの危うき「亡陽」に対しての「補」の医療である。現代医学には栄養補給はある

が、陰陽の陽を取り入れる「補陽」の概念がない。生命の維持・高揚に切実なのは補陽なのに……。翻つて東洋医学では陰陽の理論が確立されてしまはるが、生薬や食材に依る補陽は即効性に欠けるので、亡陽に対する救命・救急にはいまひとつ足りない。

こうした東西両医学の一爻不足を埋めるのに、太陽エネルギーの直接摂取という量子力学的な働きを取り入れた補陽は、これまでの補陽とは一線を画する画期的な意味がある。生命の在りように対するマクロの視点に、超ミクロの理論と実際を取り入れたことにより、これまで明らかには感ずることができなかつた大自然の生命消長の理法を、虚勞からの回生として如実に体得することができる。

病気の治療に当たつて、対症的治療はほとんどの病氣に行われているが、根本的治療となると決め手がない病氣が数多ある。そのため心ならずも対症的な措置で経過を見るしかない。この場合、自然治癒を期待するということもあるが、それも期待できないことが多い。

このようなとき、つまり自然治癒を期待するときはもちろん、それが期待薄のときであつても、生命素の相補的医療はただ太陽の大きいなる陽の付与という単純な方法で、明快な答えが得られる。直接摂取の陽の働きとは、それほど確かなものである。

これはそのものズバリのいのちもうけとなる。また、直撃的な生命の高揚は、QOLを直ちに高めるという、広い意味でのいのちもうけとなる。以上のことは本文で再三述べたことであるが、筆を搁<sup>お</sup>くに当たつて、再四、大自然の人を生かす仕組み——太陽の大きいなる陽の発露の素晴らしさ、急にして優しい働きの良さを、強調して止まない。

エネルギーは、石油の時代から、太陽の光の時代に移りつつある。もともと、石油も太陽エネルギーの変形である。万物を創り、育んでいた太陽エネルギー。私たちのいのちの救い——生老病死を超克して安心立命を得るのも、このことに帰結する。



**著者略歴**  
こばやしま す お  
**医師 小林万寿夫**

養神堂クリニック院長

平成2年 杏林大学医学部卒業

杏林大学医学部第一内科入局

同 5年 養神堂クリニック開設

同 7年 日本東洋医学会専門医認定

**確かないのちもうけ**  
——生命素との邂逅——

---

2009年5月20日 初版第1刷発行

定価はカバーに表示しております。

著 者 小林万寿夫

発 行 ㈱講談社出版サービスセンター

〒112-0013 東京都文京区音羽1-17-14 音羽Y Kビル

電話03-3941-5572

---

印刷所 東洋印刷株式会社

---

© Masuo Kobayashi 2009 Printed in Japan

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

ISBN978-4-87601-872-7

